

ARGUS DE LA PRESSE

— 21. BOULEVARD MONTMARTRE —

75002 PARIS

TÉLÉPH. 296-99-07

毎 日 新 聞 東京
MAINICHI SHIMBUN Tokyo

'85.11.-7

Biennale de Paris

夕刊

あるラジオドラマの演出に携わったことである。水道局員と都市の地下にもぐったことがある。そこに様々な音があった。深夜である。水もれの音。頭上を行き過ぎる車の音。調査員たちの会話の反響。地下の構図の中で交差するひそやかな音を、鳥養さんは現代を象徴する物音と感じる。

彼女にとって音は、常に社会とのつながりの中で存在する。たとえば来月十

くるのか、現代社会の中でどのように音が存在するのか、それが私がやっていることの原点のように思えます」

故郷の松本市でピアノ、バイオリンを習った。大查員たちの広い視野を持ちたいと慶大経済学部へ。そのころ日本短波放送で重度身体障害者のための番組製作アシスタントをした。彼女自身、幼いころ足がやや不自由であったことも、心理的には影響している。

* 音を創る *

八二年十月、パリ・ピエナナレ「音

発信点



鳥養 潮さん
(音楽家)

日、国立劇場でソロ・コンサートを開くのだが、ピアノからキーボード、さらに様々なパーカッションのほか、鉄板や鉄くすをたたいて音をつくり上げ、彼女のいう「現代の音の空間」を創造する。

「大げさではなく、捨てられた物が現代を象徴しているような気がします。都市のゴミもそうだし、もちろん人間にしても。日本人はキチッとした、きれいなものしか認めない風潮がありますから。音楽というより、どうしていま音をつ

と声」部門で称賛され、実質的な彼女の音楽のスタートを切る。一昨年から正倉院宝物、第百侯のための作曲、復元、演奏を繰り返し続けている。

「クゴは本来、エジプトから伝わった弦楽器。それも五千年前に。いわばあまりに人間の楽器といえるのです」

来年四月からロックフェラー財団の招きで一年間、米国に滞在するが、黒人ブルースの研究など、やはり人間と音のかかわりを知りたいという。

(S)